

Title	約束教育：聖約共同体形成の教育
Author(s)	大木, 英夫
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume22, 2007.3：119-121
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3240
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

約束教育——聖約共同体形成の教育

大 木 英 夫

(1) 約束教育（心を育てる） 聖学院が聖約共同体として形成して行くことと並行して、聖学院教育に聖約のための心の教育を小さいときから始める。

(2) 新しい社会・新しい人間——敗戦後、社会構造は新しい憲法によって新しい形態をとることとなった。新しい社会は新しい人間を要求する。教育は、新しい社会の構成員たるべき新しい人間の育成に関わる。教育はその課題のために、教育の目標と過程へのラディカルな変化を必要とした。——知識や技能における基礎的教育分野における変化ではなく、社会形成に関わる面での変化は大きい。そして教育基本法は、その方面に向けて新しい教育の基本方針を示したものである。今日問題になっている言葉を借りれば、社会の耐震構造の問題である。そこに偽装が行われた。

(3) 新しい社会の構造とは、憲法の結婚の規定に出てくる「両性の合意」という思想である。それは結婚家庭は社会の基本単位である。そこに原理的革命が起こった。古い結婚は、今でも見られるように「家」同士の結合であり、女性も、「他家」の存続のために「他家」に入る。今天皇家に起こっている問題である。そこに古いものが

残っている。しかし、結婚観の変化は、これまでの日本社会の慣習を革命的に変えた。それは社会構造の変化をもたらした。この結婚規定は、「心」の問題を引き出す。単なる意志ではなく、「合意」、英語でいえば“mutual consent”であるが、これは言い換えれば「契約」である。それが新しい社会の構造原理を示す。契約社会の成立と安定の根拠は、その合意の質による。その質とは約束を守ることである。心の確かさである。悪い約束ではなく良い約束、つまり善悪の識別をもつ心の確かさである。そのような心の教育は、これまであいまいな仕方ですべて「人格教育」と言われた。その言葉は正しいが、内容が分かっていない。神が人格的主体であるから、それに対応して人間も人格的になる。他者感覚はそこからである。神は絶対他者である。神との契約は、結婚契約になぞらえられた。神と人間の心の契約、聖約と言ってもよい。

(4) 聖学院は聖約共同体になる。「契約」と「聖約」との違いは、英語で言い表すしかない。神との人格的關係を Covenant と言う。中根千枝氏が「縦社会から横社会へ」などと言った。そのようなものではない。聖学院が聖約共同体となるということは、聖学院教育が、この教育原理を獲得すること、聖学院が日本の新しい社会のモデルとなることである。この課題は、これまでの日本で自覚されてこなかった。それを聖学院ではつきり自覚し、それを推進する。この社会構造理論の変化が、教育に変化をもたらした。社会理論と教育理論とは相関的である。キリスト教教育は、聖約教育と言ってよい。聖約共同体を目指す教育は、幼児から始めなければならない。人格形成とは、約束を守る力を心の中に育てることである。人格教育は、具体的には「約束教育」となる。それがあらゆる教育の基本である。それはデモクラシーの倫理的基礎づくりである。デモクラシーの成否は、市民ひとりひとりの倫理性に依存する。わたしは、むしろ「人民の帝王学」ということを言った。

(5) 今日「倫理性」が新鮮な響きをたてはじめた。日本が国際的地位を確立できないのは、倫理性ではなく、お金

で信頼を得ようとするからである。憲法前文に「日本国民は、……人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚する」と言われている「自覚」に欠けるところがありはしないか。そこに日本外交の脆弱さがある。そしてその脆弱は、教育の失敗に起因する。聖学院教育は、それゆえ教育者の自己変革と学習を真剣に検討することから始まらねばならない。そこで自ら聖約共同体形成に参加することから始めなければならない。聖約共同体とは、新しい社会の基礎構造（constitution＝憲法）の原型である。日本の戦後デモクラシーは、あたかも木を移植しないで、その果実だけを輸入し、食文化的享楽を始めたようなものであった。戦後六〇年を期して、聖学院は、日本構造改革論で行く。それは教育理論の改革をもつて取り組まれる。キリスト教教育の存在理由は、日本構造改革という課題である。

二〇〇六年三月二六日（日） 「契約共同体の形成の理論と実際」

（三月二七日、聖学院キリスト教センター会議における講演のための原稿）